

# *Titus Andronicus* における悪と悪人たち

中 村 六 男\*

Mutsuo NAKAMURA: Evil and Villains in *Titus Andronicus*

(1960年9月1日受理)

## 1

*Titus Andronicus* は Shakespeare の作品であるかそれとも他の作家の作品に彼が筆を加えた劇であるかといった問題は従来論ぜられてきた問題であつて、いまだに決定的な結論をみないようである。この劇は1593~4年に書かれたものであり、J. M. Maxwell などは1585~90年頃に書かれたであろうとさえ云つているのであるから、ともかくも Shakespeare に関係のある最初の悲劇とみて間違いがなさそうである。

この劇は悲劇と見做すには余りに未熟であつて、無暗に虐殺や処刑の多い流血惨事を扱つた劇で、悲劇というよりは 'crude melodrama' と一般に評されている。J. Dover Wilson は、

In short the play offers the usual bill of fare: motiveless malignity, continual blood letting, and a relentless sustained assault upon the tear-ducts of spectators……If not the crudest of its kind, it is less homogeneous in style and ramshackle in structure than most, while its incidents are often merely absurd. (The New Shakespeare, *Titus Andronicus*, Introd., X)

と評している。この言葉でも明らかな様に、いかに Shakespeare の未熟時代の最初の悲劇としても、彼の作品としては余りにも粗末すぎる。そこで Wilson は種々な理由をあげて、この悲劇は元来 George Peele の作品だつたものに Shakespeare が急速に補正の筆を加え、第一幕は殆んど原作のまま、後の四幕にはかなり徹底的な修正が加わつている劇だと論じている。

吾々は Wilson の説を認めることにする。さて Shakespeare がどの様な態度で George Peele の原作に修正の筆を加えたのであろうか。この問題に対して Wilson は 'You can see him laughing behind his hand through most of the scenes he rehandles.' (*op. cit.*, Introd., li) と答えている。

彼によればこの劇には Shakespeare が戯作的なメロドラマチックな滑稽劇的な要素を多分に加味させていることになる。従つてこの劇の登場人物中の最大の出来栄である悪人 Aaron さえも 'a humorous villain' ということになる。彼の説では従来批評家がこの悪人の本領を余りに真面目に考えすぎたために、十分に理解できなかつたのであると主張している (*op. cit.*, Introd., Ixii-lxiii)。しかし Shakespeare が劇作家として極めて未熟な最初期の修正加筆であるので、滑稽的要素を多分に含むにしても、彼の態度は極めて真剣に悲劇を作ろうとしていたものと容易に推察できる。Maxwell の言葉に耳を貸すならば、

Yet I cannot feel that in its broad outlines *Titus* is anything but a tragedy in intention……. But judged by the standard of its own day, not those of Shakespe-

\* 信州大学繊維学部英語研究室

are's maturity, it is well-planned play……we can believe Shakespeare to have written seriously. (The Arden Shakespeare, *Titus Andronicus*, Introd., xliii)

と云うことになる。吾々はこの劇を Wilson の様に一種の戯画的なものと見做さず、極めて未熟粗雑な劇ではあるが、Shakespeare の悲劇大成への出発点をなす作品と考えるのが至当ではないだろうか。実際にこの劇には彼の偉大な悲劇の萌芽とも見做し得るものが多分に含まれており、特に彼の中期の悲劇を形成する主要要素の一つである悪および悪人達の原型が極めて明瞭にこの悲劇のうちに見出されるのである。

## 2

この悲劇の構造や悪人達の行動をみるために梗概を簡単に述べることにする。

**第一幕, 第一場。**皇位継承をめぐつて皇子の Saturninus とその弟の皇子の Bassianus とはそれぞれの一味を従えて元老や護民官達の前で皇位を争う。護民官の一人である Marcus Andronicus はその兄である Titus Andronicus が長年にわたるゴート人征服の戦争によるローマへの偉大な功績によつてローマ人民から皇帝の候補者として選ばれたと告げ、兄弟の皇子達に平和手段によつて皇帝を決定すべきであると納得させ、それぞれの徒党を解散させる。Titus がゴート人征伐から凱旋し、ゴートの王妃 Tamora, その三人の王子, ムーア人 Aaron などを捕虜として連行してくる。Titus は25人もあつた息子達を4人を除いてすべてこの長い戦争のために戦死させてしまつたのである。今もまた一人の戦死した息子の柩を廟に葬るために運ばせてくる。彼の生き残つた息子の Lucius がゴートの捕虜の一人をもらい、その四肢を切断してその肉を廟の前に積み重ねた焚火で火あぶりにして、戦没した兄弟達に捧げてその霊を慰め、凶事の起らないようにしたいと Titus に願う。Titus は王妃 Tamora の哀願にもかかわらず宗教上の理由で長子の王子である Alarbus を Lucius に与え、王子を Titus の四人の息子達は連れ去る。Tamora は残つた王子達 Chiron や Demetrius とその残酷さを嘆き、復讐を決意する。Titus の息子達がやがて再び来て、とどこおりなく Alarbus を犠牲にする儀式をすませたので柩の弟を廟に葬れば万事が済むと報告する。Titus は戦没した息子達に告別の辞を述べる。ひとり娘の Lavinia がきて父親の Titus を迎え、親子は互の無事を喜ぶ。Marcus, 他の護民官達, 其他の人々が来て、Titus 達を迎える。Marcus はローマの一般人民が皇帝の候補者として Titus を指名したので、崩御した先皇の皇子達と共に皇帝に立候補せよと云う。Titus は老齢を理由に辞退し、長子の皇子 Saturninus を皇帝として推薦する。そこで彼が皇帝と決定され、宣言される。Saturninus は Titus に感謝し報恩として Titus の娘の Lavinia を皇妃にすると申込む。Titus 大いに喜んでそれを受け納れ、劔、戦車、およびゴート戦からの捕虜達を新皇帝に献上する。皇帝 Saturninus は特にゴート女王の捕虜 Tamora が気に入る、捕虜達を自由な身にしてやる。ところが弟の皇子 Bassianus が Lavinia は彼の許嫁であるから彼のものだといひ、Titus の息子達に助けられて彼女を連れて逃れ去る。Titus は頑迷にも、新皇帝への忠誠を破つたとして大いに怒り、彼等を捕えようと後を追う。彼等を庇う息子の Mutius を殺す。その間に Saturninus は Tamora にすつかり惚れこみ、Titus のために彼がローマの笑いものにされたと云つて Titus を辱しめ、謀叛人と呼び、Tamora を皇妃にすると宣言し、結婚式をあげる。Marcus や Titus の息子達は父親に殺された Mutius を廟に葬ることを Titus に坐して切願して辛うじて許される。Marcus は Tamora が新皇帝の気に入るとなり、かくも突然玉の輿に乗つて皇妃となつたことを語る。

やがて Bassianus は Lavinia と共に皇帝の許に来て、Lavinia について彼のとつた行動を弁明し、皇帝に Titus への誤解をとくようにと訴える。Titus は彼のために釈明するのは止めてくれと頑固にも Bassianus に云う。皇妃となつた Tamora は Titus に親切らしく見せかけ、同時に Titus 一族を亡ぼしてやる決意を皇帝に耳うちし、彼女に任せろと云い、悪智恵を授けて皇帝に Titus に親切らしく振舞わせる。そして Titus への復讐を秘かに皇帝に述べる。Titus は皇帝や皇妃の真意に気付かず、彼等の見せかけの親切を真実なものとして信じて感謝する。皆の者も Tamora のとりなしによつて皇帝の許しを得たものと信ずる。皇帝は皆の者を許したかの様に振舞い、Lavinia を始め彼女の友達をも客人として宮廷に招待する。Titus はそうしたことの返礼として皇帝や皇妃を翌日の狩りに招待する。

**第二幕、第一場。**ムーア人の Aaron は黒人で奴隷の身分であつたのであるが、実際は皇妃になつた Tamora の情夫である。皇妃とは情欲をほしいままにし、皇帝 Saturninus とローマ帝国との破滅をはかつている皇妃をすっかり恋の虜としている自からの悪党振りに悦に入っているところに、Tamora の息子達 Chiron と Demetrius とが Lavinia に対する色欲のために争いながら来る。彼等はついに Aaron の前で剣を抜いて相争う。Aaron は彼等の争いの原因が知れわたることを恐れる。彼等二人はそんなことにかまわず、どうしても Lavinia を手に入れるのだと云う。そこで Aaron は喧嘩をするよりも共謀して望みを果すべきで、Lavinia は非常に貞操の堅い女であるから、間近かに迫つた狩りに際し、林の中で悪事を働くに適切な場所へ連れて行き、二人で輪姦するのがいいし、そのことを皇妃とも相談してよい智恵を拝借しようと二人を悪事に使喚する。**第二場。**狩りの日の早朝、Titus と彼の三人の息子達と Marcus とが狩りの手筈を種々整えている。Titus は昨夜悩まされて安眠できず、朝になつてようやく気分がよくなつたという。其処へ皇帝、皇妃、その息子達、Bassianus と Lavinia、および従者達が来て、猟犬の吠える声や角笛の鳴り響くうちに狩りへと皆の者は出発する。**第3場。**Aaron が独りで木の下に金を埋めている。皇妃の Tamora が単独できて彼に愛の言葉を囁く。しかし Aaron は今日こそは彼女の息子達が皇弟の Bassianus を殺し、Lavinia を凌辱してその手や舌を切る計画であるという。一通の手紙を彼女に渡し、これは命を取る計略の手紙であるから、皇帝に渡せと云う。Bassianus と Lavinia とが来る。Aaron は Tamora に彼等に喧嘩をふきかけろと云い、彼女の息子達を連れてくると云つて去る。そこで皇妃は言葉尻をとらえて Bassianus と Lavinia とを相手に喧嘩をする。この二人は皇妃と Aaron の密会を皇帝に告げてやると云う。皇妃の息子達 Chiron と Demetrius とが来る。Tamora は息子達にこの二人が彼女をこの様なひどい場所に連れてきて、辱かしめ苦しめて殺そうとしているのだと真赤な嘘をつき、この復讐をしると彼等をけしかける。彼等は、Bassianus を殺す。Lavinia の哀願や辱しめられるよりは即座に殺してくれという切願をもきかず、皇妃は息子達に Bassianus の死骸を Aaron の指示して置いた穴の中に投げこんで隠させてから、Lavinia を凌辱させるために彼等に連れ去らせる。皇妃も Aaron を見付けようと云つて去る。その後 Aaron が豹の眠つている穴を見付けたと云つて Titus の息子達の Martius と Quintus とを連れてくる。Martius はその穴に落ちて、Bassianus の死体を発見する。その間に Aaron は皇帝を連れてきて彼等が Bassianus を殺したと思込ませてやろうと云つて去る。Quintus は Martius を引き挙げようとして彼もまた穴の中に落ちてしまう。皇帝と Aaron とが来る。Titus の息子達は Bassianus が死体となつて穴の中にいることを穴の中から皇帝に報告する。Tomora, Titus, および Lucius が来る。Tamora は遅過ぎたと

云つて Aaron からさきに渡された手紙を皇帝に手渡す。その手紙には Titus の二人の息子達が獵師とはかつて Bassianus を殺す計画が書いてあり、手紙の文面通り獵師への報酬の金が木の下に埋められていたと Aaron が自からが隠しておいた金を掘り出す。皇帝は Bassianus を殺害したのは Titus の息子達であると断定し、彼等を思う存分拷問にかけて死刑にしてやると云う。Titus は罪状が立証されるまで彼を保証人として保釈してくれと皇帝に切願するが、皇帝は罪状は明白で、この手紙を拾つたのも Titus ではないかと云つて聞き入れない。Tamora は親切を装つて、皇帝にとくとお願するから息子達のことは心配しないようにと Titus にいう。

**第四場。** Tamora の息子達は Lavinia を輪姦した後、悪事が発覚せぬように彼女の両手を切断し、舌をも切つて連れてくる。家へ帰つて誰が悪事をしたか告げることが出来るなら告げるがいいと云つて嘲笑して去る。Marcus が狩りから来て、Lavinia を見て驚き、誰が彼女をこの様なひどいめにあわせたかと尋ねても彼女は答えることができない。Marcus は悲しみながら Lavinia を Titus の許へと連れ去る。

**第三幕、第一場。** Titus の二人の息子達は刑場へと連れて行かれる。Titus は地に伏して涙を流して彼等の助命を歎願するが、誰も彼に耳を借せる者がない。彼の長子の Lucius が剣を抜いて登場し、訴えることの無益であることを父に説く。Titus は護民官達よりも石の方が情があると嘆く。何故に剣を抜いて来たのかと父に尋ねられると、Lucius は兄弟を助けるために剣を抜いたのであるが、そのために裁判官達から国外への永久追放を言い渡されたと答える。Titus はローマに留るよりはその方が却つて幸であるという。Marcus が Lavinia を連れてくる。Titus と Lucius は彼女を見て驚き、誰がこの様な酷い暴行を加えたのかと怪しみ極度に悲しむ。Aaron が来て、Marcus か Lucius か Titus かがその手を切つて息子達の罪の贖いとして皇帝に提出するならば、皇帝は彼等を助命してやる意向だと偽つて伝える。Titus はそれを信じ、皇帝や Aaron に感謝し、早速手を切ろうとする。Marcus も Lucius も自らの手を切ると云つて争う。Marcus と Lucius とに手を切る斧を取りにやらせた隙に Titus は自らの手を Aaron に切り落させてしまう。Marcus と Lucius とが斧を携えて来た時にはすでにその手を Aaron に渡して皇帝に届けさせている。Titus が彼の不幸を嘆いている所に息子達二人の首と先程届けさせた手とを使者が持つて来て、皇帝達は彼の不幸を嘲笑い楽んでいると云つて彼に深く同情しながら、置いていく。Titus 等は非常に嘆く。Titus はこの様な酷いことをした者達への復讐を決意し、Lucius に直にゴート人の許に行き、兵を挙げるようにと命ずる。Titus と Marcus とは首を一つずつ携え、Lavinia は手を口に銜えて立ち去る。Lucius は悲しく三人を見送り、ローマ人と皇帝とに必ず復讐と云いながら去る。

**第二場。** Titus は Marcus, Lavinia, および Lucius の小さい息子と食事をしている。Titus は悲しさの余り自からの胸を激しく叩く。Lavinia は悲しみを表わす手も舌もなく、唯泣くばかり。子供も泣く。Marcus は血にとまつた蠅をナイフで打ち殺す。それを見て Titus は罪なき蠅を殺したと云つて立腹する。Marcus は皇妃の情夫のムーア人 Aaron の様な黒く醜い蠅だから殺したのだと謝罪する。Titus は立腹して叱つたことを詫げる。Marcus は Titus が悲しみのために気が変になつたのだという。Titus は悲しい昔の物語を読むために Lavinia と子供とを連れて去る。

**第四幕、第一場。** Lavinia が本を小脇にかかえて逃げる Lucius の子供を追い掛けてくる。子供は助けを Titus と Marcus とに求める。彼等は叔母を恐れる必要がないと云うが、子供は叔母は悲しみのために気が狂つたのだらうと云う。Lavinia は一冊の本を見たがって手のな

腕でしきりに合図をする。その本は Ovid の *Metamorphosis* である。そして腕で頁をくつて Philomel の物語の書いある箇処を示す。Titus と Marcus とは彼女が Philomel の様に凌辱され、露顯しないように両手と舌とを切られたのだと知る。Lavinia は杖を口に啣えて、腕で砂の上に犯人 Chiron と Demetrius との名を書く。Marcus は復讐として彼等を殺すと云う。Titus は 慎重にやれと云う。そして Lucius の子供に武器庫にいつて武装させてやるから、犯人達に贈り物を届けてくれと云う。Titus はこれから宮廷に乗込んで威張つてやる、こんどこそはただでは済ませぬぞと云いながら、子供と Lavinia を連れて去る。Marcus は気の狂つた兄の Titus を天が憐み、彼に代つて復讐してくれることを祈りつつ退場する。**第二場。**Titus の孫の少年が従者を連れて Aaron および皇妃の息子達の居るところに来て、祖父が正気の時に送つたものと云つて、Chiron と Demetrius とに武器の贈り物を届けて去る。その武器には「潔白に生き、罪なき者はムーア人の投げ槍や弓を必要とせず」という意味の Horace の詩が一面に書き散らした紙が付いている。Aaron は Titus が Chiron と Demetrius との悪事を嗅ぎつけたことを知る。しかし皇妃の息子達はそれに気付かない。乳母が赤ん坊を抱いてくる。それは皇妃の産んだものであるが、情夫 Aaron との子であつて、彼とそつくりな醜い黒い子である。皇妃 Tamora はその赤ん坊を Aaron に殺すようにと乳母に届けさせたのである。皇妃の息子達も皇妃と Aaron との悪事が露顯して彼等全体の破滅になるのを恐れて、その赤ん坊を殺そうとするが、Aaron は我が子を護つて頑として殺させない。Aaron は秘密の漏洩を防ぐために乳母を殺す、皇妃の息子達に、近くにムーア人でその妻が色の白い赤ん坊を産んだばかりの者が居るからその赤ん坊を替え玉として皇妃に届け、乳母の死骸を近くの原に埋め、また産婆も殺すから直ちに来るように呼べと命ずる。Aaron は赤ん坊をゴート人達の許に連れて行き、立派な武人に育てようといながら去る。**第三場。**伴狂の Titus を真の狂人と思ひ、Marcus、その子の Publius、Lucius の息子、同族の Sempronius、Caius、Valentine 等が彼に付添つている。Titus は正義の女神を求めて歩きまわり、正義の女神を地上に派遣して邪惡を直すようにと天上の神々へ祈願文を書き、それを矢に結び付けて天に向つて盛に射る。また付添いの者達にも射させる。Marcus は皆の者にそうした矢を宮廷に射込ませる。其処へ道化の田舎者が鳩を二羽籠に入れて来る。Titus は田舎者を天からの使者と思ひ込んだ振りをする。田舎者は鳩を贈り物として叔父と皇帝の直参の一人との喧嘩を解決してもらうために護民官の所へいく途中だという。Titus は Marcus にこの男のために皇帝への請願書を書かせ、その口上書の中にこの男の小刀を包ませ、これを持つて皇帝に直訴し、鳩を献上して正式に請願するよと教え、それが済んだら皇帝が何と云つたかを彼に報告しろと云う。田舎者も皆の者も退場する。**第四場。**皇帝は Titus 等が射つた矢を手にして皇妃とその息子達と共に来る。皇帝は Titus の天上に向つて正義の女神を地上に降下させるよとこの祈願文に大いに立腹している。彼を酷い刑罰にしてやるといきまく。Tamora は表面 Titus に同情する様に装つて皇帝を宥めるが、Titus への復讐がうまくいつていることを喜んで傍白する。其処へ道化の田舎者が入つてきて、請願文と鳩とを皇帝に渡す。皇帝はそれを読み、大いに怒つて直ちに田舎者を連れていつて絞首刑にしろと云う。こんな無礼な手紙を書いたのは Titus であるから、彼の髪をつかんで引きずつて来いと命じ、彼自からが処刑人となつて Titus を殺してやると奴鳴る。恰度その時に Aemilius が入つて来て、ゴートの大軍が Lucius の指揮の下にローマに向つて全速力で進軍してくると報告する。すると皇帝は全く縮み上り、Lucius がローマ人民に人気のあるのを知つているので、意気銷沈してしまう。Tamora は皇帝

を勇気付け、彼女が行つて、甘言を用いて Titus を籠絡し、彼の邸宅で Lucius と談判を開くように取計らい、Aemilius を使者に立ててその旨を Lucius に伝えさせ、Titus の邸宅で談判中にゴート軍と Lucius との間を離間させてやるから安心してゐるやうにと皇帝に云う。

**第五幕、第一場。**Lucius がゴートの大軍を率いて進軍して来る。ローマから皇帝を憎みゴート軍を歓迎する旨の手紙が来たとゴート軍の諸侯に伝える。諸侯は Lucius に忠誠を誓い、ゴート人を裏切つた彼等の女王であつた Tamora に復讐をしてやるという。其処へ一人のゴート人が赤ん坊を抱いた Aaron を捕えて来て、彼を捕えるに至つた状況を説明する。Lucius が Tamora との不義の子を何処へ連れて行こうとしていたのかと糺しても、Aaron は黙して答えない。Lucius は彼とその子の首を縄で括つて木に吊せと命ずる。Aaron は赤ん坊の命だけは助けてくれ、そうすれば殺人、強姦、虐殺、其他種々なる悪事を白状するという。ついに Aaron は子供の命を助けるばかりでなく育てることまでも誓言させてから Lucius に彼の本性を暴露して今迄にしてきた悪事をことごとく得意然として物語り、更に更に悪事を重ねることが出来なくなつたことが残念だと云う。Lucius は絞首刑は Aaron の様な悪党には過ぎものだから、もつと拷問にかけて苦しめて殺してやると云つて縄を彼の首から解かせる。其処へ Aemilius が使者としてきて、皇帝が Titus の邸宅で Lucius と談判をしたいという旨を伝える。Lucius 等はローマをめざして進軍する。**第二場。**Tamora は復讐の女神に変装して二人の息子を連れて、Titus を真の狂人と思ひ込んで彼の書齋に忍んでいく。Titus は皇妃であることに気付く。彼女は Titus の敵に復讐してやるために地獄から来た復讐の神であると彼に信じさせようとする。Titus はその様に信じた振りをする。皇帝が Lucius と Titus の邸宅で宴会をしている間にゴート人達を追散らすか、彼等と Lucius とを離間させることを目論み、皇妃は Titus に Lucius を彼の邸宅に呼びよさせようとする。Titus は Marcus を呼び、Lucius とゴート軍の諸侯とを邸宅に来て皇帝等と宴会するやうにと伝えさせる。皇妃が息子達を連れて去ろうとすると、皇妃等の計略の裏をかくために息子達二人を後に残させる。皇妃の去つた後直ちに Titus は Publius や Caius や Valentine 等と呼び入れ、息子達を縛り上げるやうに命じて去る。息子達が堅く縛りあげられた時、Titus はナイフを、Lavinia は水盤をそれぞれ持つて入つてくる。Titus は Lavinia の手のない腕に水盤を持たせ、Chiron と Demetrius との喉をナイフで切り、その血を水盤に受けさせる。宴会には彼等の骨を粉にして、その血で捏つてパイの外皮を作り、彼等の頭でパイを作り、彼等の母親の Tamora に食わして報復してやるのだと Titus が云う。**第三場。**Lucius, Marcus, およびゴート人達が Aaron を捕虜にして来るが、Lucius は皇妃の悪事の証拠としてその面前に引き出すようになるまで Aaron を連れ去つておくやうにとゴート人達に命ずる。皇帝、皇妃が Aemilius を従えて、護民官や他の者達と登場する。皇帝 Saturninus と Lucius とが直ちに言い争いを始めようとする。Marcus が両者を鎮め、先ず Titus の献立になる宴会の準備が整つたから、それを食つてから静かに論議をすることにしようとする。Titus は料理人の恰好で入つてき、Lavinia は顔にヴェールを掛けて来る。Titus は皆の者に歓迎の言葉を述べ、御馳走を皆にすすめる。皇帝は Titus の恰好を訝り、Titus は皇帝皇妃をもてなすためだと答える。Titus は皇帝に昔 Virginius が凌辱を受けた自分の娘を殺したのは立派な行いかと尋ねる。皇帝は辱しめを受けた娘は生き残るべきでなく、生きて Virginius の悲しみをいつも新たにすべきでないので立派な行いだと答える。すると Titus は Lavinia に恥辱と共に死に、死んで父親の悲しみも彼女の恥辱も共になくせよと云つて彼女を殺す。皇帝は誰が Lavinia を辱しめたのかと

Titus に問う。Titus は料理を食えと云う。皇帝と同じ皇妃の問いに、Titus は皇妃の息子達の Chiron と Demetrius とが Lavinia を辱かしたのだと答える。皇帝はその二人を連れてこいと云う。Titus は彼等二人は皇妃のうまそうに食ったパイの中に入っていると云つて、皇妃 Tamora をナイフで刺し殺す。皇帝 Saturninus は Titus を殺す。Lucius は皇帝を殺す。Lucius は彼の父親の Titus の悲劇の真相を皆の者に物語る。Marcus は Lucius の言葉が真実であることの証拠として Tamora と Aaron との不義の赤ん坊を示す。Aemilius の動議によつて皆の者は Lucius をローマ皇帝として戴くことに賛成し、彼をローマ皇帝と宣言する。Marcus は Aaron を連れてくるように従者をやる。Lucius と Marcus とは Titus に最後の別れの接吻をし、Lucius の息子の少年も祖父に最後の別れの接吻をする。Aaron が従者達に連れられて来る。Lucius はこうしたすべての犯罪の張本人である Aaron を首だけ地上に出して生埋めにして、誰にも助けさせず、苦しめ殺すようにすることを命じ、また Tamora の死骸は葬らず、獣や鳥の餌食にするようにと云う。

## 3

以上の梗概から悪人達の行動の概要がわかると思われるが、この悲劇の主要な起因をなしている彼等を個々に少しく論ずることにする。

Aaron はどの様な動機から悪事を働いたのであろうか。この劇ではその動機は明瞭に表わされていない。ゴート人の王女であつたが、Titus の捕虜としてローマに連行され、運よくローマ皇妃となつた Tamora は今や運命に左右されない高位についたので (II. i. 1-2)、地上の栄誉ある人々も、美德の者達も皆彼女の智恵の前に恐れおののいて仕えている (II. i. 10-11)。ところが Tamora は彼に首つたけの情婦であり、皇帝 Saturninus を魅了して、皇帝とその国家との破滅を望んでいるのだから、そうした皇妃の情夫にふさわしく行動する覚悟をしようと Aaron は独白する (II. i. 12-24)。また皇妃 Tamora が悪事と復讐とのためにその智恵を働かしていると Aaron は承知している (II. i. 120-121)。

Vengeance is in my heart, death in my hand,

Blood and revenge are hammering in my head. (II. iii. 38-39)

と如何にも Aaron は復讐のために人を殺そうとしているのであるが、彼自身何のために復讐しようとするのかその理由がない。以上あげたところが Aaron の悪事を働いた動機と見れば見られ得るが、あれ程の悪事をなす動機としては余りに貧弱と云わざるを得ない。更にまた色欲によつて結ばれている皇妃 Tamora が Titus のために殺された息子の復讐をなそうとしているのに荷担して Titus の一族の者を殺そうとするのが彼の悪事をなす動機とも考えられないこともないが、果してそれが動機ならば皇帝の弟の Bassianus を殺させる必要はない。また Tamora のために情夫として身命を捧げて悪事を働いているとは決して云い得ない。Tamora との間に生れた不義の赤ん坊を Tamora や彼女の息子達に殺せと強いられても、彼等の破滅をも顧みず断然それを拒絶して、'My mistress is my mistress; this my self; /The Vigour and the picture of my youth.' (IV. ii. 106-107) と平然と云い、自らの子を救うために皇妃 Tamora をも犠牲にしようとする。其故に Aaron には悪事を働く真の動機が無いということになる。

Aaron は悪事を働くこと自体を悦び、それが計画通りにいくのを楽しむのである。Titus の息子達の Martius と Quintus とを陥れる計画で金を木の下に埋めながらする独白 (II.

iii. 4~9), また皇妃から林の中で情事を楽しもうという誘いに対して, 彼女の息子達に Bassianus を殺させ, Lavinia を凌辱させ, 殺人の罪を Titus の息子達にぬりつける手紙(II. iii. 30~50)のこのの方が色事よりも大切に楽しいのである。また Titus を偽つて彼の息子達の命を救うためだと云つてその手を切断させ(III. i. 200~205), 彼の切つた手と共に息子達の首を届けられて Titus が悲しむのを Aaron は大いに悦び楽しむのである(III. i. 236~238; V. i. 111~120)。Aaron は全く悪事其物を働くことを悦び, 他人を苦しめ不幸にすることを楽しむ, 謂わば悪事を悪事其物のためになす悪の芸術家とも云うべき悪人である。

Aaron は伶俐で用心深い悪人でもある。Tamora の息子達 Chiron と Demetrius とが Lavinia への色欲のために互に争うのを制止する言葉(II. i. 75~79), 彼等に色情を満す奸策を授ける言葉(II. i. 103~107), またそれを皇妃とも相談して悪計遂行に助言を求めさせる言葉(II. i. 120~125), Titus が彼等に武器を贈り, それに Horace の詩を書いた紙の付いているのを見て, Titus が彼等二人の悪事を嗅ぎつけたことを見抜く抜け目なさ(IV. ii. 25~36), 彼等の悪事遂行の場所の選定(II. i. 126~131)とその一切の準備計画, また Tamora との不義の赤ん坊であることの露頭を防ぐために乳母と産婆とを殺し, Muly という彼と同じムーア人の妻が色の白い赤ん坊を産んだのと Tamora の産んだ色の黒い赤ん坊とを前以つて取り替える手筈を整えていたこと(IV. ii. 142~169)等は, Aaron の subtle な抜け目のない悪人であることを示すものである。

この様に Aaron は心の黒い悪人であると同様に彼の身体もムーア人であつて黒く, 'his body's hue, / Spotted, detested, and a bominable.'(II. iii. 73~74)である。彼の黒人であるのは邪悪な心の黒いのを反映しているのである。しかしながら Aaron は黒い色の方が白い色よりも優つていると主張するのである(IV. ii. 73~105)。

この様な悪人でありながら Aaron は彼の子に対する愛情は極端な程である。Tamora との間に生れた彼の赤ん坊をその母親である Tamora や彼女の息子達や乳母などが殺せというといふ大いに立腹する(IV. ii. 63~105)。そして世の中の一切のものよりもその子の方が大切であると父親としての強烈な愛情を示す(IV. ii. 107~127)。またその子の将来にも夢を持っている(IV. ii. 173~181)。Aaron が捕えられて Lucius に処刑される際にもその子の命を助けさせるばかりでなく養育することすらも Aaron は Lucius に誓言させるのである(V. i. 20~86)。

悪人 Aaron はどの様な人間であるだろうか。悪党の Demetrius の言葉でさえも彼は 'hellish dog'(IV. ii. 77)であり, 'so foul a fiend'(V. ii. 79)である。Lucius の言葉によれば 'the incarnate devil'(V. i. 40), 'barbarous wall-ey'd slave'(V. i. 44), 'detestable villain'(V. i. 94), 'barbarous beastly villain'(V. i. 97), 'Moor, this ravenous tiger, this accursed devil'(V. iii. 4~5), 'inhuman dog, unhallowed slave'(V. iii. 14)である。Marcus の言葉に依れば 'chief architect and plotter of these woes'(V. iii. 22)であり, Aemilius によれば 'this execrable wretch that hath been breeder of these dire events'(V. iii. 177~178)である。以上の言葉は皆 Aaron の性質を表わす言葉であるが, 彼自からが V. i. 90~144 で悪事的一切を白状して, Lucius に 'Art thou not sorry for these heinous deeds?'(V. i. 123)と問われると, 平然として 'Ay, that I had not done a thousand more.'(V. i. 124)と答える。良心も道義心もある人間とは全く思われぬ極悪人である。Aaron は木の上でまさに首を絞めて殺されようとしている時にすら, 'If there be devils, would I were a devil, / To live and burn in everlasting fire, / So that I might



have your company in hell / But to torment you with my bitter tongue.’ (V. i. 147  
 ~150) とうそぶく救えなき豪胆な悪魔の権化ともいうべき人間である。彼の最後の言葉は、  
 I am no baby, I, that with base prayers  
 I should repent the evils I have done ;  
 Ten thousand worse than ever yet I did  
 Would I perform, if I might have my will.  
 If one good deed in all my life I did  
 I do repent it from my very soul. (V. iii. 185—190)

であつて、Aaron は無宗教で、善性が全くなく、唯悪事を重ねることに生き、生き甲斐を感じている徹底した悪党である。

以上述べた所がこの劇の text から直解主義的に観察した Aaron であつて、彼は第二幕から活動を始め、第一幕では全然何もしていないことからみて、Shakespeareの筆になる悪人であるか、或は Shakespeare が徹底的な修正加筆を施して作りあげた人物であることには間違いがないようである。そしてこの悲劇での最も傑出した登場人物である。しかしながら Aaron を悪魔として吾々が解するならば了解がいくのであるが、全然人間性のない Aaron を人間として解するには極めて困難を感じる。従つて Aaron を Shakespeare が修業時代に描いた拙劣な人物と評価するようになりがちである。そしてこの劇其物も拙劣な Shakespeare の作品らしくない極めて拙劣なメロドラマと評定したくなる。しかし吾々は一概にその様に断定するのは危険であり、従来この悲劇の芝居として上演されて来た人気とも相反するのである。

しからばこの Aaron という悪人を如何に解したならば正しい解釈となるだろうか。悪そのものを欲び、何等の動機なく他人を不幸に陥れたり、また他人の不運を欲ぶ様な人物は確かに人間の中に居る。吾々は善人を装つた、しかもこうした悪心を蔵している人間を日常吾々の周囲に見るのである。しかしそうした人間の心の奥には所謂劣等感が潜んでいて、それに支配されながら自己を主張する場合に嫉妬とか羨望とか虚栄とかになり、しかもそれらが無意識的状态で心に存在している場合にしばしばそれらが他人の不幸を計り欲ぶ悪心へと変質する。其故に Aaron は白人の中に生活するムーア人という黒人としての劣等感から動機のない悪事を働くことに悦びを見出しているのだとも解される。実際において Tamora との不義の赤ん坊が黒人であつたから殺せというのに対しての彼の反抗は (IV. ii. 65~72; 89~103; 116~120) こうした劣等感が Aaron の心の裡に潜在していることを示す。しかしこのことからのみで Aaron の超人間的な悪心を説明することは出来ない。

其処で吾々は歴史主義的な観点に立つて悪人 Aaron の本体を解決することを試みなければならぬ。エリザベス朝は英国におけるルネサンスの最盛期であり、あらゆるものが人間中心の思想によつて人間化された時代であつた。演劇もまた人間化されたと見ることが出来る。従つて英国に15~16世紀に流行した morality play も人間化され、古典劇の影響を受けて、エリザベス朝の演劇として再生されたのである。其故に morality play に現われる悪の象徴である vice にも人間化が行われ、それが二分化して villain と fool とに変質したのである。Aaron は vice の人間的な肉付がいまだ不完全な所が少しくあり、多少生硬な所のあるものであると解することが出来る。この様に解するならばこの劇の Aaron の本体がよく了解でき、また Wilson の ‘humorous villain’ の一面も理解できるのである。Bernard Spivack がその著書 *Shakespeare and the Allegory of Evil* で説く様に Aaron は Shakespeare の作品

に現われる人物、Don John, Richard III, および Iago と同一系譜に属し, morality play に現われる Vice に人間的性格を附与したものと見るのが正しい解釈であると思われる。

次に Aaron 以外の悪人達を観察するのであるが、彼等はセネカ風のこの悲劇の筋を進展させるための一種の道具として働く操人形であつて、未だ未熟であつて、完全に生命のある人物として活動していないのである。

Tamora の悪事の動機は色欲と復讐とであることは text に明瞭である。Titus の戦歿した息子達の霊を鎮めるために彼女の長子の Alarbus を人身御供にされ (I. i. 97-103), その復讐を Tamora は決意する (I. i. 132-141)。従つて彼女の残忍な悪事の最大動機は息子のための復讐である。更にまた Tamora は好色の皇妃であつて、黒人であるムーア人の Aaron を情夫に持ち、彼と合同して悪事を働くのである。Tamora は表面をつくろう賢明さを持ち、皇帝を意のままに操縦する術を弁え、常に善良さを装つて最後まで皇帝に Aaron との不義を感付かせず、また表面親切さを表わし、皇帝にも Titus に親切らしく振舞わせるが、Titus の一族を亡ぼすように皇帝の心に毒を注ぎ込むのである (I. i. 428-458)。また元来 Tamora は邪悪な性質を多分に持つてもおり、Tamora との情事のために皇帝 Saturninus とローマ帝国とを破滅させようと内心計つている (II. i. 20-24)。彼女は虚言が突に巧みであり (II. iii. 91-115), 残忍を喜び、道徳性がなく、女らしさが全くない悪人である (II. iii. 173-191)。また口と腹とは全く正反対である (II. iii. 304-305)。自己の悪事をめで、自からの奸智を自惚れている悪人でもある (IV. iv. 27-28)。Tamora は要するに Lucius の言葉通り 'that ravenous tiger' (V. iii. 195) であり、'Her life was beastly and devoid of pity.' (V. iii. 199) であつて、ローマに来てからの悪人でなく、ゴート人達の女王であつた時も悪人であつたのである (V. i. 16)。Tamora は復讐と色欲との動機から、その野獸的性格によつて悪事を重ねていく型通りの悪人で、決して吾々の理解に苦しむ様な悪人ではない。Titus のために犠牲にされた息子に対する復讐とか、Chiron や Demetrius といつた悪党息子に対する愛情とかより、たとえ Aaron との間に生れた不義の赤ん坊を己の保身のために Aaron に殺させようとしたとしても、やはり動物的な一種の母性愛をもつ悪人と了解できるのである。

皇妃の息子達の Chiron と Demetrius とは動物的性欲に操られる人形の様な悪人である。彼等の生活には色欲以外には何もない。そのためには兄弟でありながら剣を抜いて闘う (II. i. 29-45)。彼等には Aaron や Tamora の様な奸智はない。色欲中心に行動する道徳性に全く欠けた残忍な馬鹿者の悪人である (II. i. 71-74)。そのために Aaron が悪事を楽しむための手先となり Tamora の復讐遂行の道具とされ、Bassianus を殺し、Lavinia を凌辱して発覚をふせぐために彼女の両手と舌とを切るといつた酷い悪事を欲んでやる悪人達であつて、性欲さえ満たされるならば、善悪などは眼中にない (II. i. 133-135)。さながら交尾期のきた野獸であつて (IV. i. 96-98), 色欲を満すために幾多の女達を凌辱することが彼等の人生の願望である (IV. ii. 41-42)。要するに彼等は Aaron の言葉通り、その色情の極端に強い性質は母親の Tamora から遺伝的に受け継ぎ、残虐非道は Aaron から教え込まれたのである (V. i. 99-102)。この様に道徳性に欠けた残忍で色欲のみに生きて悪事を働く悪人は、現代の世の中にも吾々が見ることができる型の悪人であるので、容易に了解のいく悪人である。

皇帝の Saturninus も悪人である。弟の皇子の Bassianus および Titus と皇位継承の立候補者として争うのであるが、直ちに武力で決定しようとする (I. i. 2-4; I. i. 203-207)。彼は粗暴で利己的で、皇位のために一切のことに眼がくらんでいる権勢欲の旺盛な人間である。

Titus の辞退と彼の推薦で皇帝になることができたが、恩人に恩義を感じたり、国家の功勞者を遇する道を知らない。なるほど Titus に報いるとの理由で Lavinia を皇妃に決定するが (I. i. 238~240)、これは美貌の Lavinia に対する色欲からであり、また皇帝たるの地位を利用して弟の Bassianus の恋人を奪う所有欲からであると思われる。ゴート女王の捕虜である Tamora が Titus から献上されると直ちに彼女に心が動く好色漢でもある (I. i. 261~262)。さらに虚栄の強い性格でもあつて、猜疑心や嫉妬の深い男でもあり、Titus が国民に人気のあるのを妬み、また Titus の尽力で皇帝になることができたことと云われることを嫌い (I. i. 299~307; IV. V. 59~60)、Titus を邪魔物として取り除こうとした (I. i. 442~455)。彼は常に傲慢な態度で振舞つていて、Lucius の言葉によれば 'proud Saturnine' (III. ii. 297) である。しかし実際には極めて勇気に乏しく、卑怯であつて、Titus の伴狂を見抜き (IV. iv. 21~22)、彼を死刑にして自分がそれを執行してやる (IV. iv. 56~60) と非常に威張つて怒鳴つているが、その最中に Titus の息子の Lucius がゴート人の大軍を率いてローマに進軍して来るとの報告を受けると、全く滑稽な程に縮みあがつてしまう (IV. iv. 69~77)、要するに彼は権勢欲が極めて強く、色欲旺盛で、実に傲慢で虚栄心が強いが、其实小心卑怯な悪人である。更にまた間拔けて Tamora と Aaron との不義に感付かず、自からの行いの悪行であることにも気付かず、Tamora に自由に操られて悪事を重ねていく暗愚な皇帝の悪人である。この様な型の悪人も吾々は政治家や実業家にしばしば発見できるので理解が出来るのである。

## 4

Shakespeare の悲劇には *Romeo and Juliet* の様に星のめぐりあわせ即ち運勢という外的事情から専ら惹起される悲劇がある。しかしながら彼の大悲劇は偉大な人物が何か性格上の欠点などをもつていて、それが悪の力の乗ずるところとなつて悲劇を惹起しているのである。本当の「カタルシス」を引きおこす深遠な悲劇は主として悪によつて招来されている。世の中の人々が総て善人であり常に善意のみを持つて行動するならば、一時的な社会の混乱や個人の不幸があつたとしても、最後には必ず秩序のある社会や幸福な個人の生活が出現して悲劇はあり得ない。悪人が現われて、しかもそれが善人を装つて個人の生活や社会の安寧秩序を乱したり破壊するから悲劇が生ずるのである。ところが実際には何れの社会にも必ず悪人がいる。エリザベス朝の人々の考えに従えば社会や国家の縮図である microcosm である吾々の心の中に必ず悪心が潜んでいるのと同様である。そういう社会の悪人や個人の心の中に潜む悪心を吾々が賢明さを欠いて悪人なり悪心なりと認識できず、自由に跋扈させることから悲劇が生じて来る。そうした悪人や悪心の行う作用を人間的な道義的な観点から観るならばそれが悪 (Evil) ということになる。しからば Shakespeare の考え、或は彼の時代の考えでは悪はどの様な内容をもつたものであつたであろうか。この問題は簡単なものではないのでこの小論文の範囲を越えた問題であるので、ここでは論じないことにする。

さてこの悲劇に登場する悪人達は人間的な道義的な精神が極めて稀薄であつて、むしろ人間以前の動物に近いのである。其故に彼等にとつては悪は悪でないのであつて、彼等の有機的な機能であり、生命の発露であり、一種の芸術的な欲びである。さきに述べた様に Aaron は morality play の vice の人間的肉付けの不完全な、いまだ生硬な所のある悪人であるのでそれは当然のことであるが、其他の悪人達も彼等の悪心を相互作用によつてますます増長させて悪事を重ねていくのである。この劇に現われる悪人達は Titus や Lavinia の様な善良な人々

が性格上の欠点によつて自からが誤つた行動上の判断に乗じて彼等を悲劇に陥れ、世の秩序を乱して悦びにひたるのである。この意味でも所謂 'crude melodrama' と称せられているこの悲劇も、Shakespeare の他の偉大な悲劇の要素を多分に持ち、Othello, King Lear, などへと生長していく萌芽を含むものと思われる。